



内陣は、左右に二十四畳の余間をもち、中央に阿弥陀仏立像は観經の空中住立尊の尊形を整え、真宗の方便法身の形態を示しておられる。右脇壇に宗祖親鸞聖人の等身真向きの御影を安置し、左脇壇に以降、本願寺歴代二代・如信上人から順次、顕如上人までの連座御影が双幅安置してある。この両脇壇の安置御影を通して、中世本願寺の完成を視覚的に表現していることが明確である。

真向きの御影は、裏書きより一六一二年に准如上人より下附されたことが分かる。これは、石山戦争によって本願寺が解体された後、新らたな東西本願寺体制を形成する過程で、播州の真宗勢力が西派に帰属することを示したものであることが推察される。後に、一六一八年には東派の中核、船場本徳寺が発足し、播州でも東西本寺体制が整備された。

右余間は内側に、宗祖親鸞聖人が和国の教主として仰がれた上宮大師(聖徳太子)の御影が懸奉られ、外側にはやはり宗祖の読み解かれた七高僧の系譜が示されている。左余間には、帰命凡十方無碍光如来と南無不可思議光如来の光明尊号が並立に安置され、南無阿弥陀仏の功德を表現している。何れも本徳寺と縁の深い本願寺・寂如上人の下附による。

外陣の広さは真宗が在家仏教であることをよく物語るもので、二百畳の畳が敷かれ、さらに外周は一間乃至一間半の広縁を巡らし、さらに半間の落縁をもつて、播州一円の門徒の参集を可能にしている。今に至るまで、日々、某かの門徒が絶えず手を合わせるようすを伺うことが出来る。



1870~1873年に、西本願寺北集会所を移築 本願寺資料「本願寺史第二巻」[本願寺史第三巻]  
下り棟棟瓦記銘に享和二年(1802)紀州鷲森御坊講中・河州無量光寺門徒中とあり本願寺阿弥陀堂瓦と同じ刻印がある。京都時代に一時新撰組の屯所として使用、刀傷を柱に残す。  
本徳寺本堂の向拝欄干の疑宝珠は「芥田」の作で年代銘記(1738)・同じものが蓮如堂北の欄干にある(日本堂からの転用の可能性もある)日本堂は1868年に焼失。  
日本堂さらに大きく;桁行十九間・梁行十五間である。  
1984/6/15 指定文化財・市指定  
1990/3/20 指定文化財・県指定